

ミンネ歌人ラインマル（承前）

石 川 敬 三

中世ドイツ文學史上でも有名な、このラインマルとワルターとの論戰は、最初クラウスも考へたやうに、ラインマルが彼の詩 Nr. 13 でワルターの詩 (115,6) を皮肉つたのが抑々の發端であると思はれてゐた。即ちワルターがその詩の第三節で

私は時折 彼女と話すことを許されて、その傍に坐ることがあるが、その時は彼女のためにすっかり度を失つて、眩暈がする。
今ならいくらでも話せるのに、一度彼女に見られると、自分が何のためにここに坐つたのかも忘れてしまふのだ。

と云つたのに對して、ラインマルが

殘念なことに彼女は私が歎くのを聞いてくれたことがない……。私は一度も彼女に近づくことが出来なかつたのだ。なかには婦人のところへ行きながら、終日黙つてゐて、他の人には思ふことを云はせない者がある。(Ⅳ)

彼が用のないところから立去つたとて、誰もそれを大して不都合とは思はないだらう。思慮ある人がするやうに「退出を許されよ」と云ふのこそ、禮儀であり、似つかはしいといふものだ。(Ⅴ)

と云つて、ワルターの戀人に對する態度を嘲笑したといふのであるが、然しこのやうに戀人である婦人の前で物を云ふことが出来ないといふのは、それ以前からよくある常套的なモチーフであつて、モルンゲンもその詩 1361 の第二節で

彼女の前に立ち、數々の話を考へ出しながら、言ひもせず、彼女の許を去らねばならぬ時……

と云つてゐるが、ワルターのこの詩も、彼が最初に師事したラインマルから次第に離れて行つてモルンゲンの影響を受け始めた頃の作で、恐らくこれはモルンゲンの前記の詩から直接の影響を受けて作られたものと思はれるのである。

然しこれは何もモルンゲンやワルターに限つたことではなく、ラインマル自身ももつと後の作品ではあるが、Nr. 25 の第五節で

おお、彼女が見張りもされずに、私の前に坐つてゐた時、話すのを忘れたのが返へすがへす残念だ。何故あの時話さなかつたのだらう。あの時私はよき人を私に見せてくれた束の間が餘り嬉しくて、喜びの餘り何も話すことが出来なかつたのだ。私があの時見たやうに、彼女を見た者は、きつと私と同じやうにしたであらう。

と云ひ、また Nr. 29 の第二節では

私は毎日彼女に會つてゐたのだから、私が思ふことを話さなかつたのが、自分でもいつも不思議に思はれる……

と云つてゐて、前の場合のやうに喜びの餘りであるにせよ、後の場合のやうに氣後れのためであるにせよ、戀人の前で物が云へないのは、ワルターの場合と同様である。であるから、その彼がいまワルターを嘲ふといふのも少々妙な話であつて、いささか矛盾を感じるのであるが、クラウス自身後にこの Nr. 13 の IV と V とがラインマルの眞作でないことを認め、従つてラインマルの方から論戰の火蓋を切つたと云つたのを取消して、ワルターの方を挑發者とした。これには de Boor 等いまでも反對する者が少くなく、それ等の人々は以前の説を正しいとしてゐるのであるが、いまラインマルのこの攻撃を後のそれと較べてみると少々辛辣に過ぎるし、またラインマルとワルターの二人の氣性を考へ合せてみると、日頃隱忍自重を説くラインマルが挑發者とは一寸考へられず、その政治的 Spruch に於ても見られるやうに常に戰鬪的であつたワルターが挑發したといふのなら、ありさうなことと思はれる。ワルターは前にも述べたやうに、最初は直接にか間接にかラインマルに師事してゐたのが、次第に競爭者としてラインマルと鏑を削る

やうになつたのであるが、二人はただ競争者であつたばかりでなく、陰性と陽性と二人の性格上の相違からも互に反撥したであらうことは容易に想像されるのである。ではいまワルターの癪にさはつたのは何であらうか。

ワルターの 111,23 は、パロディー以外では他人の詩型を用ひることを許されなかつたこの時代にわざわざラインマルの Nr. 14 の詩型をそのまま用ひてゐて、これがラインマルの詩のパロディーであることは明らかである。この詩は二節から成り、一節宛が男の詩節と女の詩節となつてゐて、形の上では Wechsel ともとれるが、この兩詩節を結ぶものは男女二人の思ひではなく、この場合ワルター自身である男とラインマルの貴女 (frouwe) である女との間にはラインマルに對する反撥以外には共通なものはないのであるから、これは眞の意味では Wechsel とは云へない。(なほ Wechsel に關しては「ドイツ文學」十六號に掲載の拙稿「Wechsel について」を参照されたい)

ワルターは先づ初めの男の詩節で、ラインマルが Nr. 13 で「如何なる婦人も彼女に毛筋程の損傷も與へることが出来なかつた」とか、「彼女こそ私の復活祭の日(この世の喜びのすべての意)だ」とか云つて、自分の愛人を絶讃し、また Nr. 14 では

私が彼女を、ひとが他の婦人達を褒めるやうに褒めても、彼女は決してそれでよいとは云はぬ。私は誓つて云ふが、彼女は女の道を一步も踏み外さない。このことこそ他の婦人達には王手だ。

と云つて、他の婦人達の犠牲に於て自分の貴女を禮讃したのに對して

或る男は賭金も出さずに、誰もついて行けぬ程せり上げる。彼は女人を見さへすれば、自分の「復活祭の日」が王手だと云ふ。我々がみな彼のいふことを認めなければならぬとしたら、我々ほかの者はどうなるのだらう。この私は彼よりも高値をつけることが出来る。私の貴女のやさしい挨拶の方がもつとよいと。これで王手は除かれた。

と云つて反撃してゐる。(因みにウオルフラムが Parzival の中 [115,5-7] で「己ひとりの婦人のために、すべての婦人に王手を云う者の禮讃は膝をいためて跛を引くもの」と云つてゐるのもラインマルの前記の詩を指すものと思は

れる)

さてワルターが「私の貴女のやさしい挨拶の方がもつとよい」といつたのは、ラインマルが彼の貴女に近づくことも出来ずに、ただあこがれ眺めるだけで無上の幸福としてゐるのに對して云つたのであるが、ラインマルはワルターのこの攻撃に答へた *Nr. 15* や

私には彼女がすべての女人にまさつて愛しいのだと、私が誓つたとて、それがどれだけ無作法なのであらう……。 (何も賭けずにといふが) 私は自分の體を賭けたのだ。

と憤慨した後

私の眼は 精神の高揚を與へられることなしには彼女を見たことがない。

といつて、自分の貴女をただ一目見るだけで與へられる喜びが、決してワルターの貴女のやさしい挨拶に劣るものではないことを強調してゐる。然しこれはもはや單なる言葉の争ひではなく、ラインマル及びワルターのミンネに對する態度の相違という根本問題に觸れてゐるのである。

ワルターの前記の詩の女の詩節では、ラインマルが *Nr. 14* で最初は彼の貴女の有する諸徳の理想的な完全さを大いに稱讃しておきながら、最後の詩節で「彼女の物云ふ口から口づけを盗むことが出来たら」などと口を滑らしたのを捉へて、ラインマルの貴女をしてそれに抗議させてゐる。無論これはライジマルの冗談をわざと本氣に取つてのことであるが、その貴女にラインマルの不法をたしなめさせて「私から口づけを得たいと思ふ者は、禮儀正しく、もつとはかの方法で求めるがいい」と云はせたワルターは、その次の作品 *ggg* で自らその範例を示したのである。即ち「もつとはかの方法で」と云つたのは詩歌に依つてといふ意味であつて、ワルターはこの作で、前にラインマルが明らかに「口づけ」と云つたのに對して「口づけ」とも「クッション」ともとれる表現を用ひ、またラインマルが「盗む」といつたのに對して「貸す」といふ言葉を用ひて、ラインマルと大同小異のことを云ひながらも、極めて婉

曲な言ひ方をしてゐる。またラインマルの過度の禮讃を難詰したワルターは、この詩で如何に褒むべきかの手本をも示したのであつて、その中で彼は

他の人はまた自分自身の貴女をよく知つてゐる。その人はその人で自分の貴女を讃へるがいい。その際私と同じ曲、同じ言葉を使つてもよろしい、私はここで讃へるから、その人は向ふで讃へるがいい。

と云つて、ラインマルに禮讃の腕くらべをするやうに挑んでゐる。

そしてこのワルターの挑戦に應じたのが、ラインマルの Nr. 16 の讃歌である。この詩も最初は

意氣揚々たる人々は、私が口程にも女人を愛してゐないと云つて私を咎める。その人達が云つてゐるのは偽りであつて、彼等自身の名譽を汚すといふものだ。彼女は常に私には命にもひとしい。それなのに彼女は私の心を慰めてくれたことがない。

と例の如く、聴き届けられない願ひに對する繰り言を述べてゐるのであるが、その中から突如として輝かしい女性禮讃の聲が起る。

汝は幸なるかな、女、^{おんな}何といふきよき名。

そは知るに、呼ぶに好ましき名。

汝がやさしきこと心がくる時、

汝にまさりて褒むべきものはなかりき。

汝がほめうた、言葉もてつくし得る者なし。

汝に誠もてつくされむ人は幸なるかな、そはめでたき男、^{ひと}また喜ひもて生くるを得む。

汝はみなびとに喜びの心を與ふ。

如何なればこの身にもはつかなる喜びを與へ得ざる。

これはワルターがラインマルの追悼の詩 (82, 24) だ

そなたが「汝は幸なるかな、女、何といふきよき名」といふあの歌ただ一つしかうたはなかつたとしても、そなたは、すべての女人がそなたのために冥福を祈らねばならぬ程、彼女等の榮譽のために戦つたのだ

とその優位を認めたあの詩であつて、ラインマルが今ここで自分の貴女だけでなく、女性全體を讃美したのは、他の婦人達を犠牲にして自分の貴女だけを禮讃するといはれた非難に對して、身の潔白を證據立てようとしたのであらうが、彼がここで讃美してゐるのはミンネザングに於ける戀人一般、女性の理念ともいふべきものであつて、彼はここに端なくも彼の貴女なるものの正體を暴露してゐる。

さてこの讃歌に答へたのがワルターの讃歌 56.14 であつて、その初めのところで

そなた達は歡迎すべし。私はそなた達に知らせをもたらず者。そなた達がこれまで聞いたことはすべて物の數でない。

と云つてゐるのは、ラインマルのことを指すのに相違ない。

またラインマルが Nf. 23 で

かつてひとが云つた最良のこと、今後もこれ以上に云ふことは出来まいと思はれることが私を黙らせた……。かうして私は彼女を失つた。更に腹立たしいことには、彼女は今度は私に、自分のことは全くだつてくれるなといふ……

と云つてゐるのは、この歌合戦の渦中に立たされたラインマルの貴女が身の危険を感じてラインマルに沈黙を命じたのであらう。

しかし應酬はなおも續けられて、二人の對立はラインマルの Nf. 24 とワルターの 72.31 とで最高潮に達する。ラインマルが Nf. 24 の第二節で「私が自分の惱みを餘り長い間歎くので、心の高揚せる人々は嘲笑する」といつてゐるのは、ワルター一派のことを指すものと思はれるが、その第三節では

私はこの世であこがれの心をもつ限り、彼女から離れようとは思はぬ。私の喜びの最善のものと私のすべての幸福の望みとは彼女にかかつてゐる。もしも私がそれを失ふことがあれば、私は何も持たず、またその時はもはや自分がどうなつても構はぬ。私は

彼女の生命を氣遣はねばならぬ。彼女が死ねば、私も死ぬ (stirpet si, sô bin ich tot.)

と何處までも彼女あつての自分と、貴女への全面的な歸依を表明してゐるのに對して、ワルターがラインマルの立場に立つて、というよりは、ラインマルになり濟まし、ラインマルの聲色をつかつてうたつたと思はれる 72, 31 で「私はずつと沈黙をまもるつもりであつた。しかし今は前のようにうたはうと思ふ」とか「私自身の仕業で何と奇妙なことが私の身の上につつたか、まあ聞いてくれ給へ。さる婦人がもはや私を見ようとしななのだ」とか云つてゐるのは、前に擧げた Nr. 23 で述べられたラインマルの貴女による歌の禁止のことであらう。しかしそれに續けて

しかしその婦人は、私が餘り譽高からしめたので、意氣揚々としてゐる。まこと彼女は、私がうたふのを止めれば、彼女の名聲も消え失せるといふことを知らないのだ。

と頗る自負せる態度を見せ、更に

これだけは確かだ、彼女は彼女自身が私にすることを、自分自身に豫期することが出来る。彼女が私をこの苦しみから救ひ出してくれるなら、彼女は一生涯私と名譽を共にする。しかし私が死ねば、彼女(の名)も死ぬ (Gehibe ab ich, sô ist si tot.)

と云つて、詩人と貴女との關係はラインマルが Nr. 24 でいつたのとは丁度正反對になつてゐる。またラインマルが Nr. 24 の最後の詩節で

なさは私の運に定められてゐるままに示されよ……。私は今後決して彼女の支配から自由にならうとは思はぬ。ただ人々の云つてゐる空しい骨折りといふのが、私のことを指すのだとすれば遺憾だ。私もこれを始めた時は、楽しい日を見ないとは思はなかつた。しかし私は成功しなかつたとはいへ、それでも私は定めのままにしたのだ。

と大變諦念的であるのに對して、ワルターはやはりその詩の最後で

私が彼女に仕へて年老いるなら、彼女もその間に大して若返りはしない。私の髪は多分、それを見て彼女が若い者をはしく思ふやうに、なるだらう。どうか若者よ、私のために仕返へしをして、彼女の年老いた膚^{はだ}を若枝でのしてくれ給へ。

と云つてこの上なく辛辣なのも對照的である。

しかし無條件の女性禮讃をもつて、ミンネザングの本質とすれば、これは明らかにミンネザングからの逸脱である。貴女の惡口を云ふなどといふことは思ひもよらなかつたラインマルは、これに對して次の Nr. 25 で

今後も今も私の心を高めるのは、私が未だかつて一度も自分の言葉で女人を傷つけたことがないといふことである。誰か彼女等によからぬことを云ふ者があつたら、それは私が見逃したことのない罪だつた。

と云ひ、また彼の最後の歌 Nr. 35 でも

私が女人達の惡口を云ふことが出来ないでなかつたら、私は諸君にこの上なく大きい惱みを訴へたらう(I) …… 私には女人達の惡口を云ふよりは、胸の痛みの方がましだ。私はそんなことはしない。彼女等は全く氣高い(II)

と云つて、「私がそのためにどんなに苦しい目に會はうとも、私は決して惡口は云はない。私はただ歎くだけである」といつた前の Nr. 12 以來の婦人尊重の立場を飽くまでも捨てようとしなない。

このラインマルの最後の歌 Nr. 35 に關連してうたはれたものと思はれるワルターの作品 44:35 47:36 58:21 を見ると、これ等三つの詩に共通なものとして擧げられるのは、女人を無條件に禮讃するのではなくて、善き女と惡き女とを區別するといふことであつて、ワルターの女人に對する態度は極めて批判的である。殊に 47:36 では、ミンネザングの金看板といふべき階級的名稱である *frouwe* を排して、女としての美點の所有者を表はす女性全體の總稱である *wip* を推稱し、その最後で

私は感謝することの出来る女人 (*wip*) に讃辭を呈しよう。高貴に過ぎる女なんて何にならう。

と云ひつて *frouwe* に背を向けてゐる。

それと云ふのも前の「貴女のやさしい挨拶」といひ、また今の「感謝することの出来る女人」といひ、皆 *Hohe Minne* の、特にラインマルの詩に於けるミンネの一方性に對して、ワルターのミンネの相互性を意味するものであ

つて、ワルターは 52.23 や 72.31 より前の作と思われる (9.1 でも 'Minne とは何かと問ひかけて

ミンネはひとを喜ばせてこそミンネであつて、ひとを悲しめますのなら、本當の意味でミンネとは云へぬ(1)……ミンネは二人の心の悦び。二人が等しくわかち合ふところにミンネがある。だがわかち合はないなら、ひとりの心だけでは得ることの出来ぬもの(II)

と云ひ、またその後の *Niedere Minne* の歌の中に入れられる 50.19 では

戀人の愛は、相手がなくては用をなさぬ。ミンネはひとりでは何の役にも立たぬ。それは共通でなければならぬ。二人の心に通ひ、それ以外の心には通はぬやうに(A)

といつて、明確にミンネの相互性を主張してゐる。これは *Kürenberger* や *Dietmar von Eist* 以來のドナウ地方の傳統にも通ずるものがあつて、ワルターとラインマルの論戰も畢竟この古い傳統の上に立つ者と新しい流行に従ふ者との、ミンネに對する態度をめぐつて對立する、二つの見解の文學的反映にほかならないのである。

そしてワルターの側のミンネの相互性の主張といひ、*Wip-frouwe* 論に見られた人間性の尊重といひ、それ等は何れも現實の世界の勝利であつて、この現實の世界こそラインマルがその美しき假象の文學から遠ざけようと全力を傾倒したところのものである。といふのは本來のミンネザングに於てはミンネはこの世ならぬものに高められ、現實の關係から遊離される。感情が現實のものとして忍び込む時、それは宮廷的人間にとつては身の危険を意味するのであつて、このような感情を昇華せしめて、假象の世界へ追ひやることこそ宮廷的人間の責務なのである。彼等は、ミンネ以外のものが入る餘地のない非現實的な理想の世界に向つて精進努力する。わけでもドイツに於けるミンネザングの精神の化身ともいふべきラインマルは、この形づくらるべき理想にひたむきに没頭する。即ち彼は正しいミンネの模範的なあり方を提示しようとして、報いられない戀について歌ふのを自分の使命としたのである。それ故に彼の作品の殆ど全部は獨白的な悲歎の態度によつて支配されてゐて、憂鬱な諦めこそ彼の詩の基調となる。その詩はミ

ンネの苦しさ、長年にわたる奉仕の無駄に對する悲しみに満ちてゐるのであるが、しかしこれは貴女が偶々拒んだからではなく、貴女はもともと彼女に奉仕する愛人の言ふことをきいてはならないのである。それはラインマルが、Nr. 33で彼の貴女自身に云はせてゐるやうに、「私が心から愛してゐる人のいふことをどうしても聽かないのは、見苦しい憎しみのためではなく、我が身の名譽のため」なのであつて、もしも彼女が彼のいふことを聽けば、自分自身の品位を傷つけ、彼女はその幻影的な高所から去らねばならないからである。かうして貴女は求愛を拒むことによつてのみ愛人を教化育成することが出来るのであつて、幻影的高所にあつて、もはや具象的存在ではないところの貴女が自ら忌避して身を引くか、詩人自身によつて遠ざけられるかして所詮二人は合體することの出来ない運命にある。

かうして詩人にどの道残るものは悩み (Leid) だけであつて、ワルターが彼の比較的初期の作である 39, 6で「何人も喜びなくしては、ものの役に立たざれば」と云つたのと反對に、ラインマルの模倣者が或る詩 (MF 198, 28)で、「ひととは憂ふべし。憂ひこそよけれ。憂ひなくしては何人も尊からず」と歌つてゐるのは、全く師の精神を體してゐるものといふことが出来る。ではラインマルを始めこの派の人々が「悩み」といひ、「憂ひ」といひ、かうした否定的な面ばかりを重んじるのは何故であらうか。それは本來のミンネザングはロココの抒情詩のやうに、はかない地上の生活から一瞬の快樂を摘み取らうとするのではなく、永遠なるもののために備へようとするからである。悩みのない深い愛などといふものはあり得ない。深い愛に身を捧げようとするものは悩みの苦しい體驗を避けることは出来ないのである。ゴットフリートも「トリスタン」の中で

愛のために悩みを味はつたことのない者で、愛のために喜びを味はつた者はない。喜びと悩みとは愛に於ては常に不離のもの (V. 204-207)

と云つてゐるが、これはラインマルがその作品 Nr. 20で

喜びの後の悩みは心を痛ましむ。これに反し悩みの後の喜びが快いことは必定。常に喜ばしくあらうと思ふ者は、わきまへある

歎きもて、いささかも取り亂さず、一方を他方のために忍ばねばならぬ。

と云つたことの反覆にはかならない。

ラインマルは更にこの詩の中で

私は生きてゐる限り、何よりも次の唯一事に堪能でありたい。私が望むのは、如何なる男もその悩みをこれ程立派に忍ぶことは出来ないといふ名聲を一身に保ち、世の人みながこの術を私に承認することである。

と云つてゐるが、これこそ彼の根本態度とその理想を最も端的に言ひ表はしたものであつて、この詩は「悩み」の辨神論ともいふことが出来る。

しかしこの詩のみに限らず、その他の詩に於ても、ミンネ歌人としての彼は、殆どミンネに於て自分が蒙つたところの苦しみについてののみうたつてゐる。彼の作品の殆どすべては、悩みの意義を得ようする努力であるといつてもよく、彼は彼流に、悩みを愛の避けることの出来ない部分として肯定する。この悩みの上に人生を打ち立て、その中から人生肯定の力を引き出すことこそ、ラインマルがこの時代の人間完成への努力に對してなした寄與である。これはひとり戀愛について云はれるだけではなく、人生そのものについても同様であつて、ただ楽しい時だけを過したいといふのは眞の人生ではない。彼は幸福をも不幸をも、喜びをも悲しみをも包含するところの全き人生を欲するのである。そしてこのことから運命に對する一種の敬虔さが生じ、「なるやうにしかならない」(Nr. 25, II. Nr. 30, II) というのが彼の慰めの言葉となる。

「この世の中で私は健氣に辛抱すること程よいものを見たことがない。誰でも我慢強く辛抱する者は、そのためにいつも喜びも切り抜けることが出来た」(Nr. 20, VI) と説く彼の氣高い辛抱強さと、「かつては愛した人を私が憎んだからとて、何人もそれを私の不實と思つてはならない。私が彼女にどんなに願つても頼んでも、彼女はまるでそれがわからぬかのような振りをしてゐる。私の言葉が太鼓の音のやうに彼女の耳もとを通り過ぎるのだと思へ

ぬ。もしも私が彼女の愚かさを善意に解するやうなことがあつたら、私は馬鹿であらう。私は決して二度とそんな眞似はせぬ」(MF 47,9 IV)と敢然と云ひ放つたハウゼンとは反對に、「女人在私に對して日夜黙つては居れないやうな仕打ちをしても、今や私は彼女の「不興をも喜びとして受取る程の柔和な心をもつてゐる」(Mr. 20, V)といふ彼のキリスト教的寛容とが一緒になつて、彼の心の中には自分自身の悩みをば喜びと化する力が生じるのである。といふのも、この悩みは外部から強制的に與へられたものではなく、自分で進んで選んだ運命だからである。悩みによつてしるしづけられ、他の人々の上に置かれてゐるといふ誇らしい感情が彼に生氣を與へ、彼は他の人々に代つて悩みを甘受し、自分が他の人々よりも高い領域にあることを知るが故に、この悩みをも喜ぶことが出来るのである。

以上のことから知られるやうに、憂鬱な諦めが彼の詩の基調をなしてゐるとはいへ、彼自身は一般に思はれてゐる程感傷的な憂鬱病者であつたわけではない。ミンネザングが一般に詩人の自然な感情の流露ではなかつたやうに、彼の詩も彼自身の個人的體驗や感情の直接的な表現とは考へられないが、彼自身は決してそんな感傷的な人間ではなく、もつとしんの強い、一徹な、感情的といふよりは、寧ろ理智的な冷靜な男であつたやうに思はれる。憂鬱病者は彼のマスクであつて、生來さうなのではなく、この不幸な戀人といふ役が聽衆にうけることを知つてゐたので、ただその役を演じてゐるに過ぎないのである。といつても彼の場合決して道化師的なものを考へてはならない。彼は何處までも眞面目なのであつて、内心自ら世の人々の教育者をもつて任じてゐたことは確かだからである。

彼の詩は *Hohe Minne* といふ限られた狭い領域をまもつて、そこから一步も出ようとしなが、このやうなことは常に熱情を抑制して徹溫的なものとし、感情よりも知性に發言を許す者にして初めて出来ることであつて、感情的なものよりは思想的なもの、知的な方面こそ彼の得手とするところであつた。それ故に「彼は不幸な戀の *Scho-laetliker* である」(Umland) とか、「彼が表現するのは、彼の感情ではなく、自分の感情についての考へ——それも極

端に云ふなら——考へられた感情についての考へである」(H. Schneider)とか、「彼が夢中になつてゐるのは婦人に對してではなく、戀することが出来るといふ能力に對してである」(H. de Boer)とか云はれるのである。事實彼がその詩の中で云つてゐる事柄は、自分の戀人である貴女その人に向つてではなく、大部分は聽衆に向つて語られてゐるのであり、貴女その人を語るといふよりは、貴女について語るものであつて、それも特定の婦人といふよりは女性全體の代表者としての彼女、女性一般について語つてゐるといふ傾きがある。その證據に彼は終始一貫して常に同じ相手に愛を捧げたといつてゐるが、彼の作品 Nr. 17, 22, 30, 33 等から窺はれる相手の女性を決して同一性格の同一人物ではなく、彼がウィーンの宮廷に於て求愛し、臣事した貴女は彼の創作の動機とはなつたであらうが、その人物そのものは作品にとつてさして重要ではなかつたことがわかる。即ち彼のミンネが一つの態度となつたやうに、彼の貴女も一つの象徴となつたのである。彼の詩の眞實はその内的體驗にあるが、その詩の中で歌はれてゐる外部的體驗時には虚構されてゐることもあるのである。

しかし彼にあつては、貴女またはミンネについて語るといふことはとどのつまりは、自分自身について語るといふことになる。といふのは元來ラインマルの本質は自己の中に沈潜して、心のかすかな動きを追求する内省にあるからである。そして貴女の何等かの發言に對して起る詩人の感情の起伏を眞の主題とするその詩で、この内部の動きを表現するのにも、一切の聲高のもの、直接的なものをきらふ彼は、かそけきもの、控へ目なものに弱めて表現する。(例へば自分の貴女のことをいふにしても「よき人」とか「美しき人」とか「私が長らくは仕へた人」とかいふやうな間接的な表現を用ひて、*min frouwe* といふ言葉は殆ど用ひてゐない)。であるから彼はすぐれた感情の分析家であり、心的なものに於けるニュアンスの大家であるが、その多様性もひとの目につく性質のものではなく、纖細に注意深く感知しようと努められなければならないのである。さうすれば、ざつと讀んだ時には單調な反覆としか思はれなかつたものがさうではなくなり、味讀して初めてその巧緻さがわかつて來るのである。そしてこのような巧緻さがまたそ

の時代の好尚と合致したからこそ聴衆の間に前にも述べたやうな壓倒的な人氣を博したものと思はれる。

フランスの *Precieuses* の時代等にもさうであつたやうに、とかく婦人達が文學の世界に君臨して支配權を振ふ時代は感情が洗練され、繊細になり過ぎるおそれなしとしない。いま崇拜の的である女性を中心に宮廷の中で繰りひろげられた一種のサロン文學とも見られるミンネザングにも、その傾向は多分に認められるのであるが、それにしてもラインマルが活躍した十二世紀末から十三世紀初頭にかけて、彼の詩のような繊細巧緻な作品を鑑賞し得た當時のウィーン宮廷に於ける聴衆の耳もまた驚歎に値するものと云はなければならない。

使用したテキスト及び主な参考文献

- Lachmann-Haupt-Vogt-Kraus: Des Minnesangs Frühling.
- Lachmann-Kraus: Die Gedichte Walthers von der Vogelweide.
- Konrad Burdach: Reimar der Alte und Walther von der Vogelweide.
- Carl von Kraus: Die Lieder Reimars des Alten, III. Teil Reimar und Walther.
- Hermann Schneider: Die Lieder Reimars des Alten.
- de Boor-Newald: Geschichte der deutschen Literatur, Bd. 2.